朝顔日記

宇篇

一

十
二十一
興

特
へ遠3
962
1

門 遠13
號 962
卷 1

明治堂

柳吐雪滑日三條裏
夢初醒風裏聞
啼鳥問世事三月尖
吐小人之毛一函
金龍仙史

繪本朝顔日記

喜怒可以勸善
哀樂可以懲惡

大坂

三木書樓梓

仙史東海旅客向去春寓居
于百濟巷也東廬在近是以
數往來唱和于其客舍已知
其有識今茲辛未春將東
而告別也余之盛久志遍脫
葉私意仙史之文詞足緣飾

此書以乞弁言仙史笑而歸明
日復過其寓居窺其帳中閒
而無人遽問主人則曰史已東
矣而柳陰鶯語猶接其音容
也惆悵可知但見題壁一絶
則春朝晏起〻化情致不可

言ハ附巻首以遂初志云此舉
余豈無意讀者思量柳浪
識于大阪〻米街

諸侯

菊池左馬權頭武頼朝臣
大内介多々良滿興朝臣
太宰世子龍壽丸君　父少貳殿

武人

山岡玄番允秀門
冷泉帶刀爲猛
駒澤次郎左衛門春雄
岩代瀑布大
笆虬之進　父虬太夫
花岡山十郎
吉弘市正
相良主馬
駒澤祥一　父了庵
秋月弓之助推朝
荒尾虎橘　父弥平左衛門
小野右近

瓜生主水
安積潤藏

湯浅勘兵衛

陽

女流

紫光禪尼
嫩柏
水青
淺香
伽縷羅院母
夜珠
沙門

健卒傳藏
僕關助

雲居方
蘭
深雪
真柴
茂
瀬川

智遠慧長老
祠官
加茂縣主祐包
醫者
荻野祐仙
卜者
佐伯一清
修驗
伽縷羅院
庶人
則吉兵衛

月心
橘雞庵

脫罠狐

木綿屋徳兵衛

大津庄官 名傳ハらず

朝顔日記譜畧

朝顔日記目次

○一之巻
一回 雲
二回 花
三回 鳩

○二之巻
四回 歌
五回 蛍
六回 蘭

○三之巻
七回 月
八回 船

○四之巻
九回 踊
十回 文

○五之巻
十一回 諫
十二回 時
○六之巻
十三回 闘
十四回 川
十五回 豹
十六回 柴
○七之巻
十七回 蟲
十八回 猪
十九回 虫
二十回 毒
以上

故

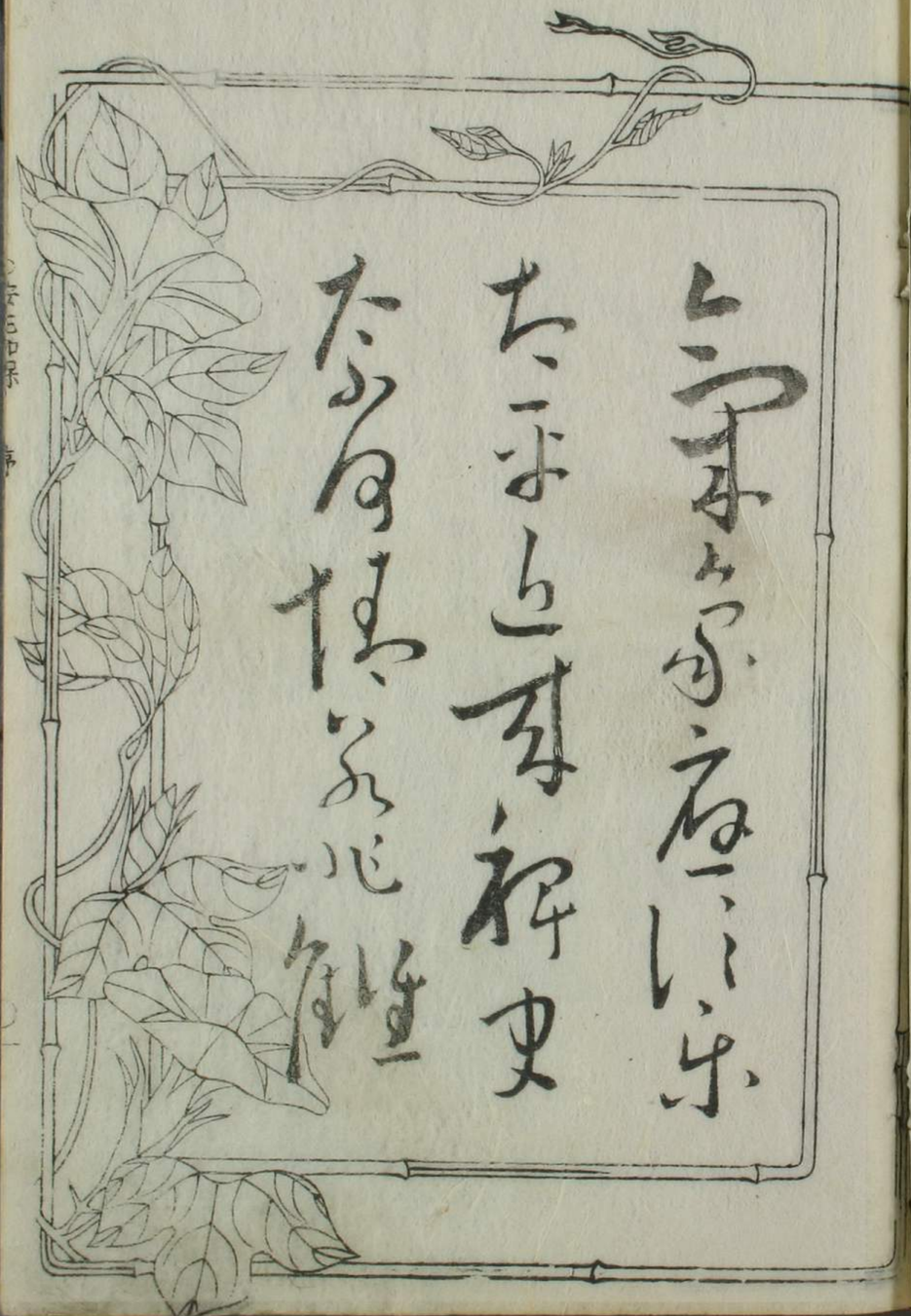
芝屋芝叟永新目

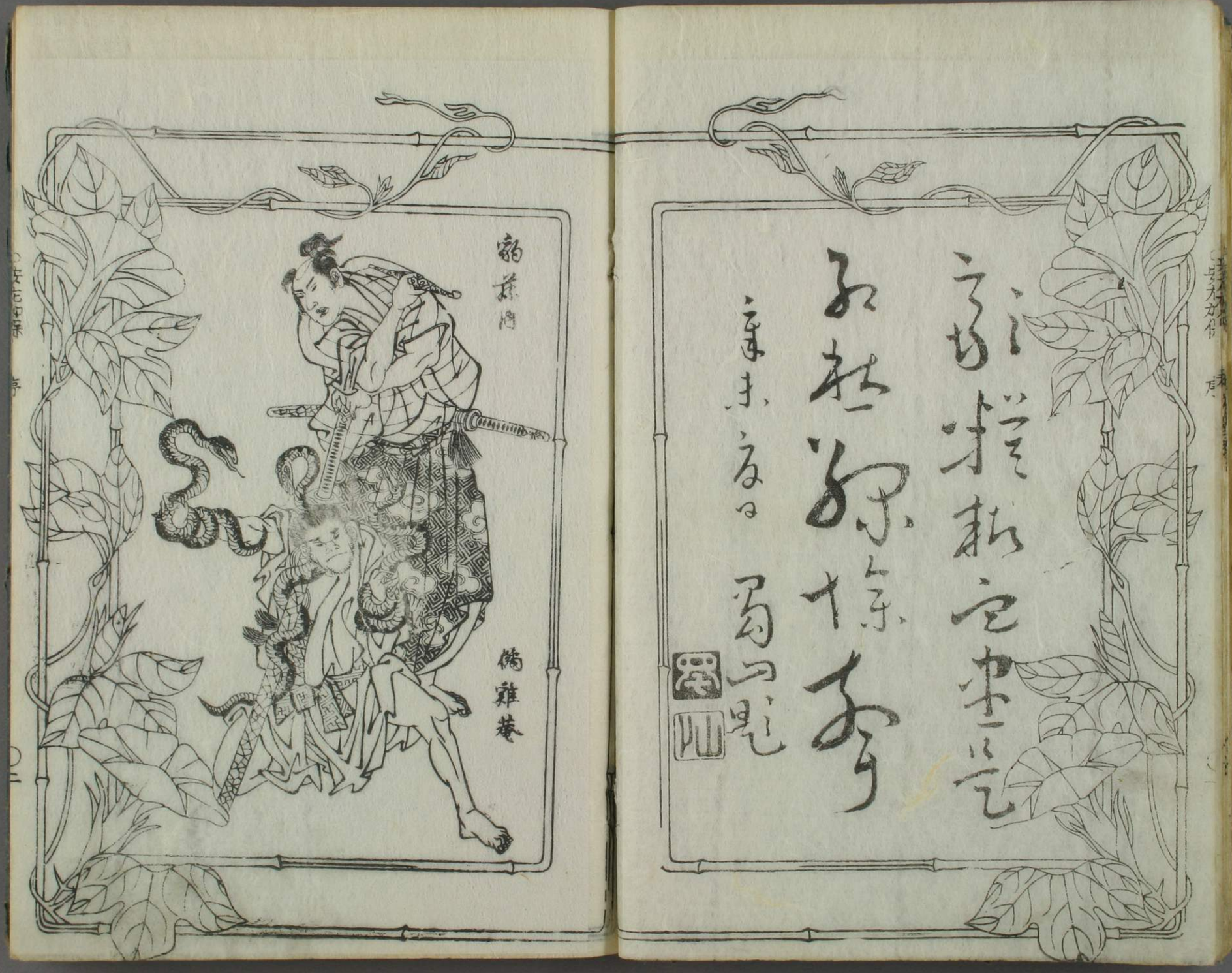
花魁　雉子　錦木　梵字　太刀　昆布
鴛鴦　拍毬　朝顔　狗　雲　浪
捏　瓢　賊　楠　燕　水
櫛　禿

朝ごはのくだ既刊刊る進く尉て出す

話柄高名家

無逸　巴隲　延命　西谷　都夕　呆子　一夢
白堂子　其光　鹽谷嘉　泉鴻　潤鳳齋　吉田　廣谷
久池五　鮮亭（京）　三團　岡吉　葛籠治　莊田　佐伯
大平　安河内　綿鉄（下寺）　一鳳　堂加林　引鶴　桃里
可櫻（粉川）　三笑　平岩　抜道　直任　久木本　呂蛤（京）
橘屋（京）　歌友（京馬尺政）　加木（伊勢）　幕屋（名古屋）




弱蔵酒
偽雑巻

佐伯二清

深雪

如月似雪風流優艷
文君淚生

假悪
惟考
結果可憐
修驗
伽藍羅院
奸叔尉狼
生
漏天
網
山岡玄蕃允秀門

青娘才慧　愛惜鸞雛
水青
洛華柳嫩賛
冷泉帶刀為猛
當ハ粧
國粧
立鉏奸

加人芸哉い雜劇の作者なり我のうゑ幕しの情
張をはたられまその稿一巻まも完すして彼のこゝの筆
乃霧ときえぬ哉もとゆゑ迂めと久し一夕偶
下ゑこの侍秀さかうゑ美されとのそ事のふ程無れて再
度きさうゑれさるゑもしこゝ比或のそくのすこのうて業の
繰ゑたゝしなくこいつけしの校義ゑひ無ふりていこゝしの
七局の冊ゑとるゑぬよて彩顔ゑ花と名つけていたゑ度
かゑうゑし我は多ゑふのゑ

涼亭兩香園主人

非山維嶽
何霊降神
鍾得其秀
生斯韻人
阿蘇真形圖

文英
武

這個
賢君

大内所滿興

情色
侠

第一
花魁

遊君瀬川

或寛或
猛經濟
良閥
士產
名花

駒澤春雄

德壽宴好茂

木綿座浄瑠

大意

前編五冊は、往古宮城阿蘇次郎春雄なるもの、産出るより成長するまで、有趣話柄どもありて。春雄一生宇治の螢狩まつり。偶秋月方之助が嬢深雪と〻佳人と奇遇其後明石の浦と夜泊して不料まこと那の深雪に猥會らぐ。ものうるき気風出来。私と私との東西と別を去。両田良縁が隔なまてを載す。

後編五冊は、阿蘇次郎放あらて駒沢次郎左衛門と称す。其君大内介殿之謀人東へ下るより種〻の傳奇おりて。ものがたり〻数路。非常の動静樹て。狂志の名城海宇を顕はす。又深雪も貞節の為にそこばくの艱苦を志のびはて。遂にそこ情郎春雄と。偶老の好逑成就する結局

柳浪志るす

朝顔日記巻之一　故芝叟遺話

柳浪　著

○一回　雲

あさがほはいとさるしてふさはしかてさらひさしたる花よそうたをけるさをは此葬よつけていと愛たる傳奇ふんあるる。

當初肥後の國よ宮城廉助春彰とふものあて代々國司菊池殿よ仕て四百石餘の采地ぬたまはて影の家隷を扶持し。男女の子寶ふさ〻冨て。何不足ふき家道おて。おの廉助緊く隻實の天賦ふるうへ博學のいまをあるふるう。主君菊池殿の御心ふかるひ。いちくやく擢用あて。儒學教授の職ぬ掌とらしめ給へ。夫より廉助は日ごとよ學校よ往還て。一藩の

子孫に訓導ち。さて此宮柱ゞ莊院い菊池川の涓紅鶴林と
ゝ地方まり。この菊池川ハ東南のゝとまる萬重の山ゝ落合ゝ
大河ゝて。逆巻水い巴渦をふゝ。激怒濤い奔馬ゝ昊ならず
猡猡蛟螭もをひべくおぶえて。もの凄まゝ江勢頻なり。後
背ゝい名たゝる阿蘇ゞ嶽高く聳て。絶巔ゝり火焔轟ゝと燄
あゞり。その音雷霆のごとく震ゝとゆき。百道黒煙ゝだきゝ
て中天に焦ゝ。時あつて泥とふらゝ岩に飛を。鷲鵰もこゝを
ぶためゝ怖のき翔。豺狼もこゝに伏えてかくをふす。周圍の巖壁べ
い宛も削成ごとく。雲樹いやゞ上るかさなて。ほねゝ金烏を
呑玉兎に吐く。其高き幾千仞とゝゝきり立ちゝず。まことに
こゝを十分猛悪げふる山の形勢ゝて。こゝを仰げば毛髪を

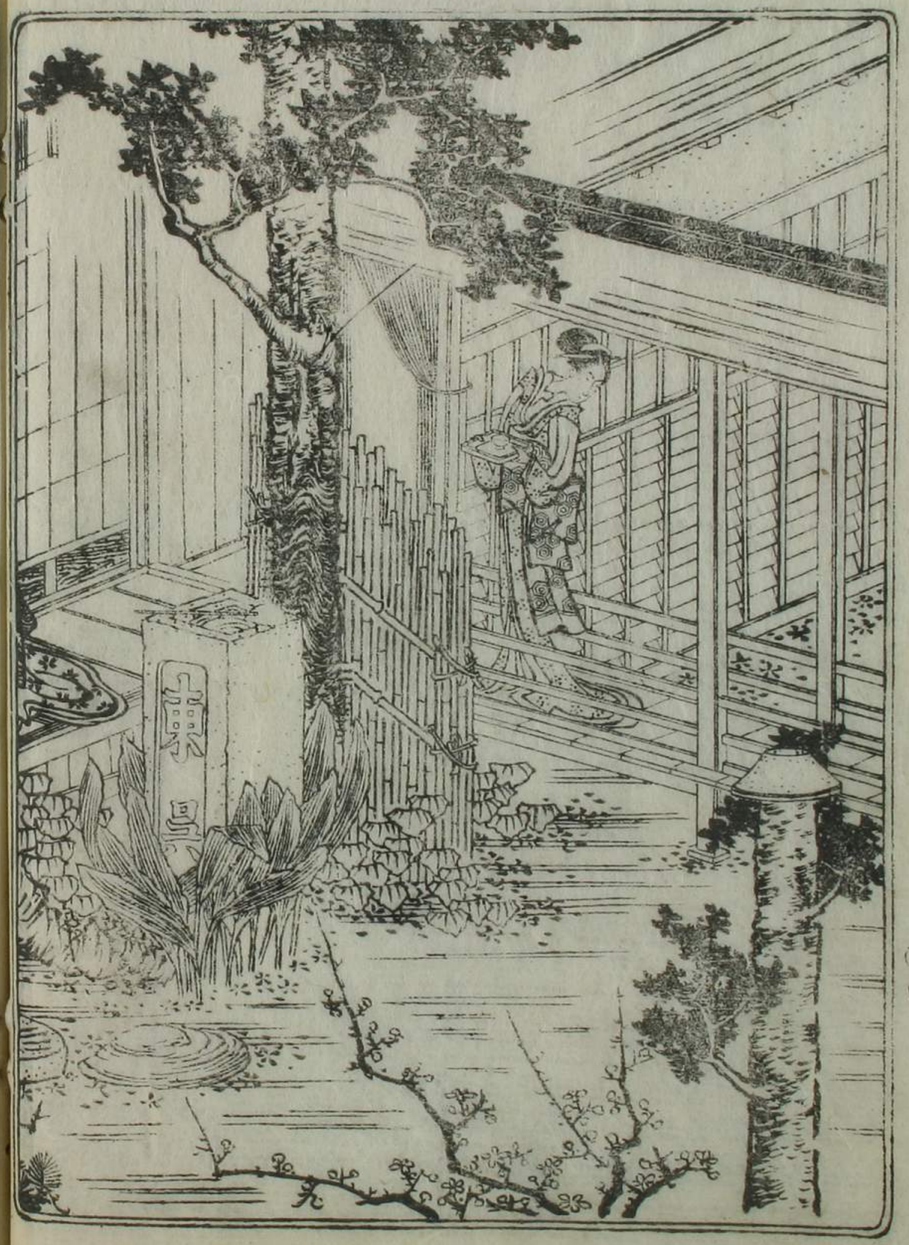
森竪ごゝりおて。ねはひい根薩摩の霧嶋。豊前の英彦なんど
世ゝ聞えたをど阿蘇い禎西第一の名山ゝて霊異もこゝ灼然
なり。往年征西将軍の宮良懐親王南帝の詔に受て。大明と
隣好に修びたまひゝ通問の使者往来たえずその
ころ明の成祖永樂皇帝より那の山に封して鎮國壽安の
山と崇めたゝふとゝや。古れ史ゝ深山大澤龍蛇に産すと紀
て。名山大川の秀氣鍾まり凝まる時ゝあをバ極て英雄豪
傑に釀ゝ生をことふん。宮城廉助ゞ渾家い嫩柏と喚るす
ものふて宮司何某が妹まり。この嫩柏婦人ふゞらゝ甚心雄しく
つねゞ良人ゞ經史を講ぞる所聽いゝゝ感激をゝとゝろあを
けん。一個の大願に發ゝ。景暮たる望おをども。天下國家に

利益をべき一奇児ゝ授けたまいまと。岳廟阿蘇權現と願ゝ
奉まつり。朝ゝし垢離ゝうき東ゝのぞゝて遥拝ゝ願丹欵を
凝しこ禱りかくてのち良人廉助五十ゝ過自己四十の坂ゝ登
そめて。不料まゝと雅娠とぞなりふゝふ。さゝぐふ儒者の妻ゝし
あまべ胎教といふゝと。ゝ守て。着帯の月ゝいまゝし言行ゝ
慎しゝ。紡績の餘力ゝハ。幼少ものゝも膝下ゝ集合て忠孝
の道ゝいひきゝせゝふ。教ゝるい学の半といへば。自他のなりにゝゝ
功績ゝるべし。かくて嫩柏ハゝゝや分娩期ゝ過せど。臨盆べゝ容
子もあらねば。自己いさらゝ。親屬まで且あやしゝ且あやぶ
むとゝくして一月二月い夢の間ゝたちゆゝ已ゝ十五箭月
ふぞゝふふ。嫩柏ハゝどし鬼胎とも懐むゝと。安ゝ

ゝろもなゝゝろ。いつゝその年も晩ゝて。春待前一日ゝ
ゝつ。園家い注連かざるハ。蓬茅ゝひいと。のゝゝあひて
ゝまし。ゝの夕嫩柏ゝと陣痛ゝふぞ。大家慌ゝゝ穩げ
婆ゝ符水ゝとゝたさいぐ。一盞茶時ゝて。陣痛も小止ゝにぞ
家公廉助ハ茶餌ゝふくきゝと指揮ゝし。柱ゝゝゝゝゝ
ゝいゝて。おもいずゝゝゝぬ。そのゝゝ誰といふゝず咄々
起ね。山神降臨まをいと叫ゝゝゝ驚き。但見きゝ。ゝ
白雲ゝうち乗たる一員の金甲神出現ましゝゝその威
嚴ゝたりゝ拂て雄偉し。廉助喫一驚。慌忙退去て席に
額突ゝちゝしゝけゝ。忽然紙門の裏頭ゝり。呱々と産
声高やゝゝあけたるゝ。赤子ゝ似氣まき大音ゝり恰好

自鳴鐘も鳴响喨ハ。五更の一点とぼしく。人々歡語ていと
執閑なり。廉助おがえず頭ゑ擡て回顧せバ。山神ハかい
らをうせたまひて。初鵲屋角ふきぐるくふぞ。佐と起て障
子ひらけバ。東天亮くとれしあけぐとのけしきぞ。やとら一
輪の嫩紅のごとえて看く御嶽の巔をとふを。一道の白氣こ
の家の破風口より起つて。横さまふ靉靆とたるべき。嶽の
半腹ふたらまりて絶ざるい不思議なりゝ光景なり。おの
暁誰いとともふく宮悌大人の荘院よりあやしの白氣を
のごとをそりふし赤子の啼こ方二丁ばかりの向ふすえ
ふい古怪いうさまふきい神の接たまふ児の産をしゆへふ
るべしと。此界隈の里人もいひあうとぞ。聽て年がはした

管家婆ゞ赤子ゑ襁褓ふたくそうき抱き来り。家公廉助に
見せて慶賀とふセバ。廉助脱てこを ゑ見るふ。彷髪ハ艶
艶しくのび玉を欺ひくそどうごるるゞ。眼のさやのとづれなる
さま。よも凡庸ふいあらじ。こふ山神の霊異とひ久後い
國器ふも成べきものふらんと。未たのもしくぞおもひ侮るゞ
祥瑞あるふめで。那の御嶽ゑ象どうて乳名ゑ阿蘇松と
名ばけ。ふよふく慈しを育る。さるバこの児成長の後縁故
ありて駒澤何某と名を更め。大内家の執政とふ。その君
ゑ賢者と仰ぐしゝ。國ゑ富ゝ民を恵を。まゝ幾十の書籍と
著ハして。世の利益とのこせり。伊人胸ゑ韜略ゑ藏し。才ハ経
濟ゑ包唐山ふてハ諸葛孔明天朝ふてハ青砥藤綱ふもぞ



阿蘇山の麓紅鶴林ゐる宮城無助が家小正月元日麟児産る時道の雲氣その家をうおって獄神臨凡まして霊異只ならず

劣るまじき器量なり。且那の諸葛青砥ふも優て。その標致世ふるぐれ。威あつて猛らず。そよろづの風流ぶさへあしけるの。その弱冠しこき。天上の月老いゝよ奇巧をさけんおろ美姐し。一線の赤縄ぶ締しがあるときい紊あるときハ綱てゐどし。絶こまゝ續き。後来めでたく鸞匹の速好と遂年ぬ。其根由ハ

ぶけひろまのいらさかたぶ。てゝすはうげれ法をふさふ。

あもれ一村さめのくらゝしとふをこうしし。

此一関の唱歌ようへとぐちぶ惹いぐゝし法。

○二回　花

さても宮塚廉助が乙の子　阿蘓松ハ影の年月ぶかさね今茲僅十一歳。奇童の聞あるともつて。大守菊池殿より召出さる。今日おん初て執謁ぶふしふけろ。菊池左馬頭殿法くゝ

ふをを御覧したまふよ。その顔色容止のあてふるさま。露とふくめろ花よ優千回ぐがけるの玉ふひとしくあたらも輝煌ぞかをなり。頭殿ちらく召を。阿蘓松とハ汝よふ。詩作ふんぐもふせろよし。今この庭階の風趣ぶ。即興に仕まつを

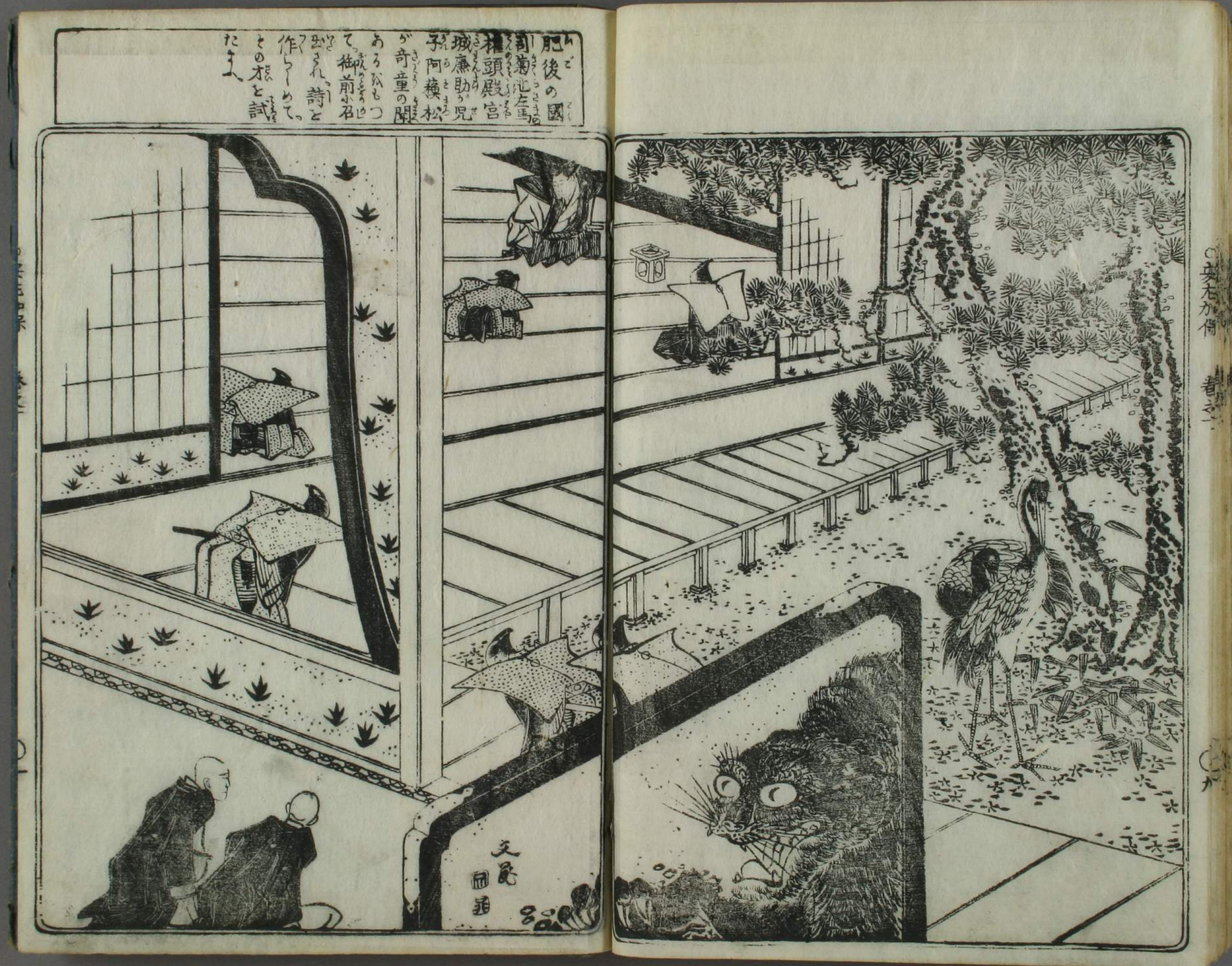
と仰せけるゝ阿蘓松ひをふして上意ぶ畏る。いさゝかろびをたろ態もふく。をごろふ五言の絶句ぶ法くを。ふゝ油うち褰げ。雪まず王脆ぶ運らしたく。清く白く繭紙よ一揮と寫完てをを呈ぐ。その字様一個々龍蛇のごく墨痕いと旬やゝまり。殿御感るのゆなゝず。當坐よ二百石の新地と下さる。紅梅影の庖從列よ加へさせたまふ。ををよう阿蘇松

八直ゑ潭府ゑ止まりて。陰日向ふく給事ゑぞもげそるこの紅梅殿とゝゑ所以い。菊池殿ふゝく儒道を重んぜらゑ。賢明たぐひふく。一個の良臣吉弘市正といふもの。登庸ひて執事とふしたまゑ。吉弘ハ二まき忠直の人ゑて。寛猛ふどよくゑつりぎつふゝりて領分よくれさまり。黎庶總太守の仁德ゑぞ仰ぎるる。この君侯にねゑ風流ゑ好ませたまひ。御物數奇のおまり。美貌をぐゑたる児姓十員ゑ召らゑ。個く緋を穿られふゑと襲させて。脇近ゑめしにゝはせたまふ。ゑゑゑ者るもの。その打扮の華麗ゑる以賞。紅梅殿と称せしゝ。いつとふく出ゝいひふらいせしとぞ。此殿の頭領ハ荒尾虎橘とて。當家の一老荒尾弥平左衛門が二男なり。父が權勢ゑるふまゝせ。日頃

我意ゑほゝり旁若無人ゑぞふるゑひる。さるゝ新桑の宮殿阿蘓松。君の恩寵ゑ以蒙ふり。ゑきりふ出頭をる以猜ゑ。同僚どもとにねゑ抵誣いひて嘲弄ふせども。阿蘓松ハ生得て老趣き性ゑゑゑべまをゝ。慟慟ゑ謙選て。いつも悖らゝとふゝれば。那客氣の旁輩どもをせんをべふくて止ぬ。ゑのゝち三四年が間話ゑし。かくてのち阿蘓松十五歳。虎橘十八歳ふるりゝゝ。今の春ハ當屋形の御先祖武德院殿の御遠忌ふあたまりこをふよて。御香火院水禪寺ゑおゐて。三晝夜の大法會以まゝうけらゑ。祖君冥福のためゑ水陸道場以修せしゝらゑて。その前後三日のあいだ。御領内の殺生以禁。まゝ一面ゑい青錢精米以下行あて。貧民以賑ゝたまゝ。當日ハ三月十八日とぞことゝゝる。抑も

よの寶刹ハ寧一山の開基ふして。代々支那より高僧渡来て。住持せらるゝ。往延慶元年開山寧一和尚。國主の招提ゑ應して下向わり。當國第一の風水好き福地ゑトて。一座の密林ふゝゑ山脚ゑ伐開き。土木の工ゑ悉して草創あるける大伽藍なり。宮殿樓閣宏壯と建ぢゝき金碧慧日と相映ぬ。山門の額ハ皓月山の三大字ふて。南帝後亀山院の宸翰なり。後背のかとの懸厓ふりハ。一道の瀑布漲ぎるとち。中ふどなる巖稜ゑ激て段ゑおせバ。あたらも双龍の珠ゑあらそふゝとなやまたる。那邊をべて躑躅山吹ときをだも。藤波まつうちあらゑつ。まゝ客殿のとまをいそぐ。欄の砌まして。那の飛泉のるゞを引入て。おはきやうまる池ゑるせり。澄きつる水ハ西洋鏡ゑのべたるがごゝ。そどゝ五濁の垢ゑ滌よたへて。おまゑ照鑑せバ毫髮をもかぞへたべし。水禪の名虛しからで。清浄ゑるさとふゝゑ匠。かくてその日ゑ暮りけるべ。菊池左馬權頭武頼朝臣御泰詣ゑて。従者い大伴惣門の下馬場よのゑさを。侍衛のものゝを昇ーて。大雄寶殿より上せたゝ。御側室雲居の方ハ。御腰下小簇擁けるゝ仕女たち。ゑ。總て雪白ゑる裝束ゑ。せさせ給ひる。こい大切成御法の場ふる故なりとぞ。さの時佛殿の階下よ立並たる例の紅梅伴の児姓共と其間遠ふらねバ一頭ハ紅一頭ハ白一對の美人隊ゑふして正ーく紅白の親隨ふまべ。あるとあるひとゝを。ゑゝをゝて喝采しげゝ。知客寮よハ。法施香資の墨子ゑならべたて。庫裏の側よハ米嚢山のゑとく積おけゝ。正殿の中央ふる

須彌壇よゝ。故肥州刺史從四品拾遺補闕武德院殿叙阿大禪定門と寫たる御靈牌なまくけ。七寶の卓ふハ灰白色ふる。至正銅の瓶子ふ一枝の金花なる挿さゝり。寶鴨ハ奇楠と炷らし。銀燭ハ青煙なる吐俎豆ゑ盛たる百味ハ。山海の珍異と畫たゞ。住持智遠慧長老。勅賜の紫衣なる着し。綴錦の袈裟なる紆ゑ纏。影の僧侶なる卒ひ。珊瑚の珠數ゆまぐりにく。恭く霊牌ゑ向いせらきて。讀經のこゑいと殊勝なり。ふのときく右左ゑ排列たる緇徒たち。種々の具なるらして。法樂と奏せらるゝふぞ。さしもふひろらうる殿上。ひつそとふづまりて。物の音いとハたうをゝこゝろ。天人も花なる雨をべくゝをぞろ降る人もものあハきをして。ほどし。浮泥のあわるさくちす。やゝ時なる移りて。法會うたのごとく修のひ完てぬ。この時梵鐘殷殷と響法鼓鼕々とふゞわたるゑぞ。こや日中といふらきる。菊池殿ハ智遠長老の誘ふひゑ應て。書院の上段ゑ坐なしめらきゝたくしと眺をたしたまへバ。客殿の造ざま修らいざまハさらふもいとず庭の砂子も玉なる磨たらんやうれるゑ。池の鏡のどうふ靄をたゞて。まゝ仄うれる木末どもの。さうじきたるころれるふいといたうけしきゝて。よゝたいをる櫻花ハ。枝もたハむぞうをふさなをだきゝう。翠簾の外よりい和暖うゑふちふく風ゑえれらず。旬たるけしなる。寫さそふといゝう風袋あをて。いまや散もはじめず咲ものこらず。いとなるもひきふゝくぞゝえゝう菊池殿一坐なる屹と見をたしたまひて。香爐峰


肥後の國
菊池左馬
權頭殿宮
城廉助が児
阿蘇松
が奇童の聞
あるをもつ
て。御前小召
されて、詩を
作らしめて、
その才を試
たまふ。
文晁
画

の雪ハいろふと仰せけるふ。御側ちゝく侍坐せる群臣誰おつ
こその意ハ解をるものなく。個々顔見あはせて呆れ
菊池殿いと没興げよこたびハ御聲高やうに。香爐峯の雪ハ
如何と呼ぜたまへば。遠侍に在ける、御児姓宮城阿蘓松上
意ハうち聞半晌御前の動静ハ覘ひしぐ人々全然奮の
ごとく。黙坐して。あへて一語の回答ハ票しあぐるものもなくて。
泥梨を居たるやうなり。阿蘓松いと不堪技癢おもひ。その
まゝ立いと起て茶道風也ハ呼び。和主とやく御覧遮る
あの鈎簾とバ。高々と捲上うるべしと耳語ぬ風也ハてう
ハ得て。そのまゝ膝行落椽ふいたり。おほよそあいひ三四間
ばかり簾子をとり除けバ。忽地天亮たるがごとくそこら

あかるしとゝをやうふちりまさり。綻そだまうる櫻花ど
もの梢のかざりまぐるふく見えて。今一入の興ハそへさ
せたまふ。菊池殿。こゞめ簾子ハ隅て。御透見あらせら
ましかどハ。何とやらん。水月鏡花の御ふてちふて。いと眺ら
うくおぼしけるふ。いはゆ阿蘓松がいちとやく心ばき。簾
ハまっせしその才の敏しにハ御感賞ありける。長老を
はじめ如意もて膝ハうち。さてし宮城氏の子ハ希代
の才人うかと。頻よ称賛して止たまはず。さまどふハ坐中に
はいまだ。その意ハ解しえざる面持なるふそ。長老御前ふ
對ひて。君候知召ぶとく。唐の白樂天ハ遺愛寺鐘歌枕聴
香爐峯雪撥簾看といふ絶唱あり。天朝ふてハいづまの天子

のおほんときふう。雪のいと高くふりける日、便殿に出御ふ
今のごとく香爐峯の雪ハ如何と詔ありけるに、玉座に侍す
ける公卿衆、いまゞ天意に會せをして、志ゞ躊躇終に[illegible]
も。宮女清少納言、いちはやく起て、玉簾を褰げあげらるし、
故事と符節に合せたる頓智あり、そもハ女流こゝもハ人、
今昔といかゝもをゝ。をろともふその才惠ハ姉ふるとゝ例に
ひきて稱賛たまへば。頭殿よりも御氣色うるハしく、其
ゝ阿蘓松にちかくゆさゝ、いそしく出来せるとの上
意にて、差換の御佩刀に御手ぞら賜ふ、渠ゞ發明に
ぞ賞したまふ、よもふまりて阿蘓ハ、てからず面目に
ほどこしりる。さもべ此事に聞傳て、御供前のうちもい、